Ⅲ　ヒアリング調査からみた経営概況

概　　況

１　製造業

一般機械	：おおむね横ばいで推移
輸送用機械器具(自動車部品)	：おおむね横ばいで推移
電気機械器具	：おおむね横ばいで推移
金属製品	：おおむね横ばい
プラスチック製品	：一部に上向く動きがみられる
印刷・出版	：厳しい状況が続いている
銑鉄鋳物（川口）	：おおむね横ばいで推移

２　小売業

大型小売店	
百貨店	：一部に明るい兆しが出てきている
スーパー（総合・ディスカウント）	：おおむね横ばい
商店街	：厳しい状況が続いている

３　情報サービス業

ソフトウェア業	：おおむね横ばいで推移

１　製造業

(1) 一般機械　　『おおむね横ばいで推移』

【業界の動向】県内の一般機械の鉱工業生産指数は、平成１９年６月から２か月連続で前年同月を上回って推移しており、直近の７月は前年同月と比べると１８.９％上回った。

【景況感】「受注は一定量を維持しており、仕事はあるため普通である」、「悪くはないが勢いが出てこない、パンチ力に欠ける」や「良いとも悪いとも言えない、普通である」など、すべての企業が「普通である」としており、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】「前年同期と比べ、ほぼ変わらない」や「良い意味で平行線で推移している」など、「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。また、「減った」とする企業からも「今後主力部門の売上げが戻ってくる見通し」との声が聞かれた。

【受注単価】すべての企業が「厳しいままほとんど変わらない」としている。「技術力と生産設備の向上により、コスト削減を図っていくしかない」、「景気がもたつき気味であり、競合他社も価格転嫁していないため単価アップは困難」や「見積もり合わせが当然であり、交渉の余地がない」など、厳しい状況が続いている。

【原材料価格】「ここへきて上昇基調に一服感があるものの、高止まりしている」や「今春以降値上げ要請は来ていない」との話があり、原材料価格は落ち着きつつあるとする企業が多かったが、「スチールスクラップやステンレスの価格上昇が続いている」とする声も聞かれた。

【採算性】「原材料費と人件費の上昇分だけ採算が悪化した」とする企業もあったが、「製造経費の見直しなど、企業努力によって採算性の向上を図っている」や「販売単価は上げられないため、製造期間を短縮することでコスト削減を行っている」など、自助努力により採算性を好転させている企業もあった。

【品目別の状況】「印刷機械は、輸出が増加基調であることから、生産を増加させている」、「射出成形機は、自動車関連の設備調整と中国製の増加により減少している」や「半導体製造装置関連は、在庫調整の解消が見込まれ、今後持ち直してくる見通し」などの話があった。

【設備投資】「将来を見据え、次世代半導体製造装置向けの新規投資を行った」など、すべての企業が実施しており、今後についてもすべての企業が実施する予定である。「会社が良い方向へ向かうように新規投資を行い、高付加価値生産を実現させていく」など、将来のための新規投資を積極的に行う姿勢が見られるようになってきた。

【今後の見通し】「今後については何とも言えない」など、ほとんどの企業が「先行き不透明」としている。さらに、「アメリカの景気動向が懸念材料である」との声も聞かれた。

(2) 輸送用機械器具（自動車部品）　　『おおむね横ばいで推移』

【業界の動向】国内の四輪車生産台数は、平成１９年６月、７月と前年同月を下回っていたが、直近の８月は６.４％の増加となり、３か月ぶりに前年同月を上回った。

【景況感】「輸出向けの仕事が好調で、好況と言える」とする企業や「仕事はあるが利益が出ないので、不況である」とする企業もあったが、「悪くはないが利益が出にくいので、好況とは言えない」など、多くの企業は「普通である」としており、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】「８月が予定よりも悪く、減った」とする企業もあったが、「増えた」とする企業が多かった。「新型ディーゼルエンジン向け部品が引き続き好調で、アジアや東欧向けの従来型も好調である」や「輸出向けの小型トラックが好調である」などの話があった。

　新潟県中越沖地震の影響は、「あった」とする企業と「なかった」とする企業に分かれた。影響があったとする企業からは、「生産を取り戻すために休日出勤で対応した」との声が聞かれた。

【受注単価】「下がった」とする企業もあったが、「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。また、「原材料価格が上昇しても製品価格は上がらないのに、『材料が下がった』という情報が出ると、すぐに値下げ要請がくる」との話もあった。

【原材料価格】「自己調達分が少ないので、影響はない」とする企業もあったが、「上がった」とする企業が多かった。「チタン合金が値上がりしている」や「鉄線が値上がりしている」などの声が聞かれた。また、「材料メーカーは大手なので、価格交渉で非常に強気である」との話もあった。

【採算性】「前年よりも良くなっている」とする企業もあったが、「悪くなった」とする企業が多かった。「固定費は変わらないので、売上げが減少し、採算性が悪くなった」や「原材料価格の上昇分を製品価格に転嫁できないので、非常に厳しい」との声も聞かれた。

【設備投資】製造機械や検査機の導入など、すべての企業が実施した。今後については、実施する企業と実施しない企業に分かれた。

【今後の見通し】「来年３月までは好調が続くと思う」、「企業間の格差はより開き、勝ち組でもコストは厳しい」や「原材料価格の上昇分を製品価格に転嫁できないと非常に厳しい」など、様々な声が聞かれた。

(3) 電気機械器具　　『おおむね横ばいで推移』

【業界の動向】県内の電気機械の鉱工業生産指数は、平成１９年５月から３か月連続で前年同月を上回っており、直近の７月は前年同月を１６.５％上回った。

【景況感】「不況ではないが、好況と思ったことはない」や「最大限の工夫でようやく利益が出る程度なので、とても好況とは思えない」などの声が聞かれ、「普通である」とする企業が多く、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】「仕事量は変わらないが、単価が下がったので売上げは減少した」とする企業もあったが、「上半期決算前の受注が増えており、９月は特に好調である」や「クリスマス商戦やアジアの旧正月向けが増えている」など、「増えた」とする企業が多かった。

【受注単価】「下がった」とする企業もあったが、「値下げ要請には応じていない」など、「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。また、「生産量が少なく利益の出ない製品は値上げを要請しており、認められない場合は撤退も考えている」との声も聞かれた。

【原材料価格】「耐熱性樹脂などの特殊材料は特に値上がりしている」など、すべての企業が「上がった」としているが、「今まではすべての物が上がっていたが、止まったものもある」との話もあった。

【採算性】「良くしたいが、現状維持が精一杯である」など、「ほとんど変わらない」とする企業もあったが、「原材料価格が上がったのに対して、製品価格は下がっており、採算性は悪くなった」や「同業者との会合でも、採算性が悪くて苦しいという意見が多い」など、「悪くなった」とする企業が多かった。

【設備投資】「今までに実施した設備投資の効果を見るため、実施しなかった」とする企業もあったが、「海外工場で生産設備を導入した」など、「実施した」企業が多かった。今後については、「今までの効果を見ながら判断する」や「実施するかどうかを検討中」など未確定の企業が多かった。

【今後の見通し】「先行き不透明」とする企業が多かったが、「精密部品は品質向上の要望が強いので、海外から日本へ仕事が戻ってくるだろう」との声も聞かれた。

(4) 金属製品　　『おおむね横ばい』

【業界の動向】県内の金属製品の鉱工業生産指数は、平成１９年２月以降４月を除き前年同月を上回って推移しており、直近の７月は前年同月と比べると６.８％上回った。

【景況感】「仕事量はあるが、原材料高で利益率が下がっている」や「社会保険料の負担は増え、国内消費は上向かず、好況という実感はない」など、「普通である」とする企業が多かった。また、「ここ３年間で、売上げは一番落ち込んだままである」と話す企業もあり、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】「ほとんど変わらない」とする企業が多かったが、「業界全体では変わらないが、企業数の減少で、１社当たりは増えている」や「主力部門の減少が続いているので、減った」などの声も聞かれた。

【受注単価】「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。また、ニッケルに特化した製品を扱う企業からは、「ニッケルの急激な価格高騰で、製品価格がニッケル価格と連動するようになり、上がった」との話があった。

【原材料価格】非鉄金属の価格上昇が続く中、「ステンレスは価格があまりにも上がったため、安い鋼種へ需要が移った。そのため、調達価格は一時期に比べて安定してきている」との話があった。また、原材料ではないが、「原油高や人件費増などで薬剤が値上がりしている。今後は関連するものに影響が及ぶだろう」との声が聞かれた。

【採算性】「原材料価格の上昇分を売上げの増加でカバーしている」などの声が聞かれ、「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。

【品目別の状況】自動車関連は、引き続き安定している。半導体製造装置関連は、落ち込みが続いている。また、新規受注品では、「駅構内の災害時の緊急標示板が増えてきているので、今後期待できる」との声が聞かれた。

【設備投資】複数の企業が、生産設備の入れ替えなどを実施した。今後については、「工場を拡張する」や「見積もりソフトを購入したい」などの話があった。

【今後の見通し】「良いとも悪いとも言えない状況が続くのではないか」などの話があり、「先行き不透明」とする企業が多かった。

(5) プラスチック製品　　『一部に上向く動きがみられる』

【業界の動向】県内のプラスチック製品の鉱工業生産指数は、平成１９年１月以降前年同月を下回って推移しており、直近の７月は前年同月と比べると１.３％下回った。

【景況感】「依然として不透明感が漂っている」や「当社は知恵を出して頑張っているため普通だが、中小企業は総じて厳しい」などの声が聞かれたが、「部門にもよるが、全体でみればかなり忙しく、好況といえる」とする企業もあり、一部に上向く動きがみられる。

【売上げ】「部門によって好不調があり、トータルでは前年同期並みである」とする企業もあったが、「好調な受注に支えられ、順調に推移している」や「新規受注品の立ち上がりが悪かったことから予定を下回ったものの、全体では若干増えた」など、「増えた」とする企業が多かった。

【受注単価】「ほとんど変わらない」とする企業が多く、「以前から受注している量産品は下がる一方だが、自社技術を注入した製品は、適正な価格を維持できている」などの声が聞かれた。また、「上がった」とする企業からも「原材料が３回値上がりして、やっと１回上乗せできただけである」との声が聞かれた。

【原材料価格】全般的に上昇傾向にあり、「合成樹脂やガラス繊維が値上がりした」や「発注管理を徹底しているため低く抑えられているが、原油価格上昇の影響で、１０月からすべて１５％値上げするとの話が来ている」などの声が聞かれた。

【採算性】「コスト削減努力により、多少良くなった」、「製品価格への転嫁以上に、原材料費が上昇しているため、悪くなった」や「ほとんど変わらない」など、様々な声が聞かれた。

【品目別の状況】「電子デバイス関連は好調だが、光通信関連は横ばい、電機関連は横ばいないし微減傾向である」、「医療機器関連は安定的に推移しており、半導体関連は今後３年ほど好調が続く見込みである」や「トラック関連はほとんど変わらない」などの声が聞かれた。

【設備投資】すべての企業が実施しており、「切断機と折り曲げ機を購入した」や「トラックを入れ替えた」などの声が聞かれた。今後についてもすべての企業が実施を予定しており、「工場の増設と、量産設備の導入を検討している」などの声が聞かれた。

【今後の見通し】「医療機器関連や半導体関連は好調に推移すると見込まれるので、良い方向に向かう」とする企業もあったが、「先行き不透明」とする企業が多かった。また、「技術を駆使した先端的な事をやらないと、コストでは海外に太刀打ちできない」との話があった。

(6) 印刷・出版　『厳しい状況が続いている』

【景況感】「普通である」とする企業もあったが、「不況である」とする企業が多かった。「仕事量はあるが、利益につながるものが少ない」、「必死にやっているが、売上げが増えない」や「紙代が上がっても、製品価格には反映できず、かなり厳しい」との声が聞かれ、厳しい状況が続いている。

【売上げ】「一般印刷物やダイレクトメールが好調だった」など、「増えた」とする企業もあったが、「減った」とする企業が多かった。「８月が例年と比べて悪かった」などの声が聞かれた。

【受注単価】「原材料価格は上がっているが、製品価格には反映できない」や「下がったままで上がる見込みもない」など、「ほとんど変わらない」とする企業が多かった。一方、「加工工程の一つ一つを細かく見積もって価格交渉をした結果、単価が上がった」とする企業もあった。

【原材料価格】すべての企業が「上がった」としている。「紙代が上がっている。大手は大量注文するので値引率は高いが、中小企業はそれがないので厳しい。企業努力で対応しているが、これ以上は無理なレベルまできている」などの声が聞かれた。

【採算性】「外注していた部分を内製化したので、良くなった」とする企業もあったが、「原材料価格の上昇分を価格転嫁できないために悪くなった」など、「悪くなった」とする企業が多かった。

【個別分野の状況】「チラシは価格が下がりきっており、利益が少ない」との声が聞かれた。また、「官公庁の仕事は電子入札でチャンスが広がった。今までは１、２校だった高校のパンフレットの仕事を１０校程度取れた」との話もあった。

【設備投資】「新しい機械を導入した」や「数年後の工場移転のために土地を取得した」など、「実施した」とする企業が多かった。今後については、「機械の修繕程度は行うが、新規の機械導入の予定はない」とする企業が多かった。

【今後の見通し】「すべては、原材料価格の上昇分を製品価格に転嫁できるか次第である」など、「先行き不透明」とする企業が多かった。

(7) 銑鉄鋳物（川口）　『おおむね横ばいで推移』

【業界の動向】銑鉄鋳物（川口）の生産量は、平成１８年１２月に前年同月を上回ったものの、その後６か月連続して前年同月を下回っており、直近の平成１９年６月は前年同月と比べると３.８％下回った。

【景況感】「仕事量は減っていないので決して悪くはないが、競争は益々激化している」や「仕事はそれなりにあるが利益は出ない」など、一定の仕事量はあるものの収益性が向上しておらず、すべての企業が「普通である」としており、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】「業績好調な一部の大手企業向けとエレベーター関係は増加したが、その他は減少しており、全体としては変わらない」や「仕事が減ることはないが、ずっと横ばいで推移している」との話があり、すべての企業が「ほとんど変わらない」としている。

【受注単価】「原材料価格の上昇を理由とした単価引き上げ交渉を行い、満額ではないものの実現に至った」や「総体的に多少は上がっている」など、ほとんどの企業が「上がった」としている。逆に、「自動車業界からは、単価引き下げの要請がある」との声が聞かれた。

【原材料価格】すべての企業が「上がった」としている。「スチールスクラップが小刻みに何度か上がった」、「石油関連やシリコン、マンガン、樹脂等の副資材など、すべてが上がっている」や「今秋に銑鉄が上がるとの話が聞かれる」など、かなり厳しい状況が続いている。

【採算性】「売価は多少上がっているが、それ以上に原材料費が上がっているため、採算は悪化している」、「コスト増により損益分岐点が年々上昇している」や「利益ゼロで商売している状態」など、厳しい声が聞かれた。

【個別分野の状況】「引き続き大型建設機械向けが好調である」や「中国の需要が旺盛なため、エレベーター向けが２割程度増加している」との話があった。逆に、「中国製が増加している影響から射出成形機は減少している」や「自動車産業向けは減少基調にある」との声が聞かれた。

【設備投資】「環境対策のため、工場内に粉塵を抑えるシャワーを新設した」とする企業もあったが、「利益が出ないためできない」など「実施しなかった」とする企業が多かった。今後についても「生産能力増強のための新規投資を行う」と前向きな企業もあったが、「更新や金額の小さいもののみ実施する」とする企業が多かった。

【今後の見通し】「今年いっぱいは現状維持できるだろうが、それ以降は分からない」や「中国の動向次第で変化する」など、「先行き不透明」とする企業がほとんどであった。また、「金利の上昇が懸念材料である」との声も聞かれた。

2　小売業

(1) 大型小売店

百　貨　店　　**『一部に明るい兆しが出てきている』**

【業界の動向】商業販売統計によると県内百貨店の販売額は、既存店ベース、全店ベースともに、平成１９年７月は３か月ぶりに前年同月を下回ったが、直近の８月は２か月ぶりに前年同月を１.７％上回った。

【景況感】「婦人衣料は回復してきたが、紳士服や子供服は良くなっていない」など、「普通である」と話す店舗が多かったが、「売上げ目標も利益目標も達成することができ、好調である」と話す店舗もあり、一部に明るい兆しが出てきている。

【売上げ】「６月末にスタートしたクリアランスセールは前年並みだった」や「８月の猛暑で、夏物商品の処分は進んだが、秋物衣料は動かなかった」などと話す店舗が多く、おおむね前年並みだった。

衣料品全体では、前年売上げを割り込む月もあったが、主力の婦人衣料では「お得意様に個別に案内を送るようになって、増えた」や「リニューアルで拡充した専門店が、安定して伸びている」と話す店舗もあった。

靴やハンドバックなどの身の回り品や化粧品については、どの店舗でも好調だった。「バックなどの購入単価が、ブランドの導入で上がっている」、「改装前セールが当たった」や「化粧品は、新商品の展開や顧客管理で伸びている」などの声が聞かれた。

食料品はどの店舗も堅調で、中でも名店のお菓子については、「今一番好調だ」との声が聞かれた。

この夏の猛暑に関しては、「水着は２割、日傘は３割伸びた」や「食堂・喫茶が良かった」などの声が聞かれた。一方、「生鮮品の質の管理で苦労した」や「都心店でさえも、秋物衣料は苦戦しているようだ」などの話があった。

【採算性】「ほとんど変わらない」とする店舗が多かった。また、複数の店舗で「海外ブランドの化粧品売場を設置したため、人件費の負担が増えた」との話があった。

【設備投資】すべての店舗が改装を実施した。今後については、「年度後半は、販売に注力していく」など、予定している店舗はなかった。

【今後の見通し】今秋は県内各地で大型店舗が開店するため、「ここ１年が正念場になる」や「百貨店ならではのサービスを強化し、差別化していく」などの声が聞かれた。

スーパー（総合・ディスカウント）　　**『おおむね横ばい』**

【業界の動向】商業販売統計によると県内スーパーの販売額は、既存店ベースでは平成１７年１２月に２１か月ぶりに前年同月を上回ったが、平成１８年１月からは下回って推移している。全店ベースでは平成１８年１１月以降は平成１９年７月を除き前年同月を上回って推移している。

【景況感】「客数は増加したものの、客単価が減少しており、全体的に前年同期並みの水準である」や「パイの食い合いとなっている状況に変化はないが、一定水準で落ち着いている」などの声が聞かれ、おおむね横ばいとなっている。

【売上げ】前年同期と比べ、「ほとんど変わらない」とする店舗が多かった。７月は台風と天候不順の影響から低迷したが、８月に入り夏らしい暑さが続いたことから７月分を取り戻す以上に好調な夏商戦を展開、しかしながら、９月は残暑の影響から秋物が出遅れ８月の貯金をはき出した格好となった。

品目別については、食料品は各店舗とも比較的堅調であった。「夏は暑さの影響から飲料、アイスクリーム、麺類、その他できあい物が良く売れた」や「生鮮品を含めて全般的に好調だった」などの話があった。

衣料品は、「８月は夏物が良く売れたが、７、９月が足を引っ張り全体では若干前年を下回った」との声が聞かれた。

その他の商品では、「少子高齢化からペット用品が安定して推移している」や「マーブルコートのフライパンなど、話題性や利便性の高いものが良く売れている」との声も聞かれた。

【採算性】「話題性や利便性が高い付加価値のあるものをプライベートブランドとして開発、販売することで利益率を向上させている」とする店舗もあったが、「競争が激化する中、原価が上がっても売価は上げられないために悪くなった」や「安いものしか購入しない傾向が強く、高額商品の販売が低調である」とする店舗もあり、様々な声が聞かれた。

【設備投資】「食品フロアを改装した」とする店舗もあったが、補修・修繕程度に終わっている店舗が多かった。

【今後の見通し】「競合店と天候次第で、良くも悪くもなる」、「このまま変わらない、知恵を絞り自分達が変化していくしかない」や「雰囲気が大切であるため、政治の安定や明るい話題があれば良くなる」など、様々であった。

(2) 商店街　　『厳しい状況が続いている』

【業界の動向】平成１９年９月の内閣府の月例経済報告は、個人消費について、「持ち直している」と総括している。

【景況感】「やや良かった」との声も聞かれたが、「悪いまま変わらない」や「回復は全く感じられない、特に小売店は苦しい」などの声が多く聞かれ、厳しい状況が続いている。

【来街者数】「日中が暑かったので、夜の人出が多かった」、「マンション工事が終わって、人通りが戻ってきた」や「特に減っていない」との声も聞かれたが、「八百屋など生鮮品や日用品の店がなくなり、商店街に毎日来るお客がいなくなった」や「中心市街地の中が高齢化し人口が減っている」と話す商店街もあった。

【売上げ】「猛暑で飲料の売上げが増えた。他の商品も減っていない」や「数は変わらないが単価の高い浴衣が売れた。若い男性も購入するようになってきている」との声も聞かれたが、「喫茶店は、賑わっているように見えても客の滞留時間が長く売上げ増にはつながらなかった」、「商店街の核となっている百貨店の売上げが減り、商店街の売上げも減っている」、「同じ商品を通販では３割引で売っていて、太刀打ちできない」や「昨年レベルを目標にしているが厳しい」など多くは売上げが伸びていない。

【元気なお店】「旅行関係は良い。団塊世代のお金が旅行・レジャーに向かっている」や「シャッターの閉まった店も多いなかで、化粧品会社系列のエステ店が開店した。女性対象のサービス業は元気がある」との話があった。

【設備投資】実施した商店街はなかった。「飲食店はテナントが入れ替わっている」や「賃料が高いので、小売店は採算が合わず、小売店が撤退した後は、飲食店やサービス業になってしまう」と話す商店街があった。

【今後の見通し】「季節感のはっきりした気候、秋らしい秋になれば、少しは違うかもしれない」など期待感がある一方で、「経済全体の景気は商店街にはあまり関係がない。どうやって維持していけるか」や「大型店、通販との競合、コスト高の三重苦が続く」など厳しい見通しが多かった。

３　情報サービス業（ソフトウェア業）　　『おおむね横ばいで推移』

【業界の動向】経済産業省の特定サービス産業動態統計調査によると、情報サービス業の売上高は平成１９年４月から４か月連続で前年同月を上回って推移しており、直近の７月は前年同月を６.８％上回った。

【景況感】「良い状態にあるのではないか」とする企業もあったが、「売上げ目標に達せず、先行きも不透明なことから、好況とはいえない」や「売上げは少しずつ増えているが、昨年ほどの忙しさがない」など、「普通である」とする企業が多く、おおむね横ばいで推移している。

【売上げ】「システム開発や派遣、プログラム作成の分野が若干増えた」とする企業もあったが、「このところ、分野別にみても変化がない」や「長く受注していた仕事が終わったため、前年度比ではかなり下回っている」など、様々な声が聞かれた。

【受注単価】「若干上がった」とする企業もあったが、「上げたいが、ほとんど変わらない」とする企業が多く、「派遣の単価を、年数に応じて上げるよう交渉しているが、認めてもらえない」などの声が聞かれた。

【採算性】「売上げが増えたので、多少良くなった」とする企業もあったが、「人の入れ替わりがあったため、作業効率が落ち、一時的だが悪くなった」や「赤字覚悟だったが、社員の努力により何とかもっている」など、様々な声が聞かれた。

【個別分野の状況】システム開発関連では、「会社合併絡みのシステム変更・統合関連が増えている」、「自治体向けは、市町村合併関連が一段落したものの、来年度から施行される後期高齢者医療制度の関連が伸びている」や「医療情報システムを展示会に出展しているが、関心は持ってもらえるものの、なかなか受注にまで至らない」などの声が聞かれた。

　データ入力については、「国内では減少傾向が続いているが、請け負う企業も減っているため、売上げは変わらない」と話す企業があった。

【設備投資】「社屋を改装した」と話す企業もあったが、ほとんどの企業が実施していない。今後についても、予定している企業はなかった。

【今後の見通し】すべての企業が「先行き不透明」としており、「顧客が携帯電話事業から撤退するとの噂があるが、どうなるかによって大きく左右される。違う分野で柱を作らないとならない」や「ＩＴバブルの頃は、人さえいれば良かったが、今は『何ができるか』によって、経営が左右される」などの声が聞かれた。